様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２５９２

研究課題名（和文）家庭科における小中一貫シティズンシップ教育カリキュラムの開発・実践

研究課題名（英文）Development and Practice of Citizenship Education Curriculum in Home Economics Education from Elementary through Junior High School

研究代表者
土岐　圭佑（DOKI, Keisuke）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０７５９０４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　義務教育学校の5年生から7年生を対象に，家庭科におけるシティズンシップ教育実践に関する実証的研究を行った。その結果，家庭科におけるシティズンシップ教育実践において，以下のような教師の姿勢や役割が重要だと示唆された。
　第一に，子どもの私的で多様な生活経験や生活実感及び既有の知識を尊重し，それらを起点とした対話的な授業展開を重視する教師の姿勢。第二に，子どもの私的で多様な生活経験や生活実感及び既有の知識に基づく考えとクラス全体，社会的課題，当該問題の解決，授業後の学級生活及び学校生活とをつなぐ教師の役割。第三に，児童の考えを可能な限り実現させる姿勢をとり学校外の人材等と連携を図る役割。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　家庭科のカリキュラムに小中一貫したシティズンシップ教育実践を取り入れ，授業を実践するために，教師はどのような姿勢をとったり役割を果たしたりすることが重要なのかということに対する知見を得られた点に学術的意義がある。また，教育効果の具体的な検討はできなかったものの，こうした教師の実践に支えられ子どもたちのシティズンシップを涵養していくことが，市民社会の創り手の形成につながると考えられ，この点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：We conducted an empirical study of citizenship education practices in home economics for 5th through 7th graders in compulsory education schools. The results suggest that the following attitudes and roles of teachers are important in the practice of citizenship education in home economics.
 First, teachers should respect children's private and diverse life experiences and existing knowledge, emphasize dialogic teaching process, and play a role in connecting individual ideas with the class and social issues. Second, teachers are to play a role in connecting individual ideas based on children's private and diverse life experiences and existing knowledge with the life of the class and school after lesson. Third, teachers are to take an attitude to realize children's ideas as much as possible, and to play a role in connecting children's ideas with the outside the school.

研究分野：家庭科教育

キーワード：家庭科教育　シティズンシップ教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

家庭科では，1989 年改訂の学習指導要領より中学校と高等学校でも男女共修が実施され，日常生活の営みを軸足に据えて地域や社会とのつながりを実感し，自分や家庭だけでなく地域や社会の生活を創造する学びを重視してきた。しかし，そうとらえているのは，家庭科関係者だけという場合が多い。当然，調理や裁縫に関する知識や技能の習得は，家庭科という教科の独自性と関わり欠かせないことではあるが，少ない時数の中で実習中心に授業を構成するケースが学校現場では少なくない。このことを解決するために，家庭科においてシティズンシップ教育を推進しようとする動きが出ている。ただ，具体的なカリキュラム構成，教師に求められる姿勢や役割，子どもへの教育効果といった点について研究の蓄積が望まれる状況である。

２．研究の目的

本研究では，既存の家庭科及び技術・家庭科家庭分野のカリキュラムにシティズンシップ教育実践を取り入れ，家庭科におけるシティズンシップ教育実践を展開する教師の姿勢や役割と子どもへの教育効果を検討することを目的とした。

３．研究の方法

授業は，A 大学附属 B 義務教育学校の 5 年生から 7 年生を対象に行った。授業の計画にあたっては，「①問題への着目→②現状把握・分析→③問題の特定→④解決の選択肢を出す，解決の選択肢検討→⑤決定と行動・省察」という 5 つの過程に即したシティズンシップ教育の展開を提起した研究を参照した。以下に各授業の概要を整理する。

第一に，5 年生の授業についてである。

授業は，「暖かく快適に過ごす住まい方」という題材で全 4 時間構成とし，2022 年 2 月に 5 年 1 組と 5 年 2 組の 2 クラスで各組の担任が実施した。

分析データは，1～3 時間目の授業の録画記録を文字化した逐語録，4 時間目に児童たちがわかったことをまとめた成果物を対象とした。

分析の手順として，まず，逐語録には， 1～3 時間目の授業における教師や児童の発話に対して順々に番号を振った。次に，各逐語録の発話に基づき，教師は，授業の中でどのような姿勢をとったり役割を果たしたりしているか，また，児童たちの成果物とも関連させながら児童たちはどのような学びを得たか，という視点に着目し，分析と考察を行った。

授業の概要として，1 時間目は，児童たちが社会科での既習内容から家の特徴を想起したり，身近で行われている寒さ対策を考えたりした。その上で児童たちは，学校などで暖かさに関して困っていることを共有し，安全に暖かく過ごすための方法を検討した。2 時間目から 3 時間目にかけて，児童たちは，学級全体で安全に暖かく過ごすことができる実現可能な方法を検討した。4 時間目では，前時で検討した方法を実践し，その有効性を検討した。

第二に，6 年生の授業についてである。

授業では，「共に生きる地域での生活」という題材で，地域の基幹産業である漁業に着目し，魚食の減少という現象を主題として扱った。授業は，2022 年 10～11 月に，6 年 1 組と 6 年 2 組の 2 クラスで各組の担任が実施した。6 年 1 組の授業は全 5 時間構成，6 年 2 組の授業は全 4 時間構成とした。

分析データは，授業の参与観察記録 4 時間（1 組は 5 時間）分，授業の録画記録を文字化した逐語録 4 時間分（1 組は 5 時間分），児童たちがわかったことをまとめた成果物を対象とした。

分析の手順として，まず，逐語録には，各授業における教師と児童及びゲストティーチャーの発話に対して順々に番号を振った。次に，各逐語録の発話に基づき，教師は，授業の中でどのような姿勢をとったり役割を果たしたりしているか，児童たちの成果物とも関連させながら児童たちはどのような学びを得たか，という視点に着目し，分析と考察を行った。

授業の概要として，1～2 時間目において，児童たちは，まず，自分たちの生活と地域とのかかわりを考えたり，自分たちの魚介類を食べる頻度や好みなどを考えたりした。次に，児童たちは，ゲストティーチャーから説明を受けた魚食に関する全国的な状況と自分たちの魚食に関する状況を照らし合わせ，魚食が減少する理由を考え，全体で共有・検討した。そして，児童たちは，魚食の減少に関する情報を集め，問題に着目し探究テーマを決めた。3 時間目（1 組は 3・4 時間目）の授業において，児童たちは，問題解決につながる実現可能な方法を個人で考え，その考えをペアで共有しまとめた。4 時間目（1 組は 5 時間目）の授業において，児童たちは，前時にまとめた方法をグループの中で発表し合った。最終的に，児童たちがまとめた成果物は，A 大学の学生ホールに掲示された。

第三に，7 年生の授業についてである。

授業は，「私たちの成長と家族・地域」という題材で全 2 時間構成とし，2023 年 12 月に 7 年 A 組と 7 年 B 組及び 7 年 C 組の 3 クラスで教科担任が実施した。

分析データは，2 時間目の授業の参与観察記録とし，授業の中で教師がどのような姿勢をとったり役割を果たしたりしているか，という視点から分析と考察を試みた。

授業の概要として，1時間目において，生徒たちは，普段家で家族とかかわりながら生活をしていることを振り返ったり，生活を営むために家庭の仕事がありその分担の状況を考えたりした。その上で，男女平等の意識に関するアンケート（家庭生活や学校生活及び社会全体としての男女の地位，性別役割分業観などの項目）に回答した。2時間目の授業では，前時のアンケート結果を踏まえ，結果の理由や背景要因を個人やグループで考え，共有・検討した。

４．研究成果

第一に，5年生の授業についてである。まず，教師は，児童たちの様々な生活経験や生活実感及び既有の知識を尊重して自由に表現できる機会を児童たちに保障した。それを通して，教師は，私的な生活経験や生活実感及び既有の知識と学級全体とをつなぐ役割を担い，児童たちの考えを起点に問題を導き出せるようにした。それによって，児童たちは，自分以外の他者のニーズを読みとり，問題に着目し，それに対する自分の考えを深め得ることが示唆された。次に，教師は，問題解決に向けた児童たちの考えを現実的かつ効果的であれば可能な限り教室内で実現させる姿勢を示し，児童の考えと授業後の学級生活とをつなぐ役割を担った。それにより，児童たちは，現実的に可能かどうかという視点から，問題解決の選択肢を批判的な見方を含めて検討でき得ることが示唆された。さらに，児童たちは，見通しや展望をもって学習に取り組み得ることや，学級内から学校全体に視野が広がり他の児童のニーズを自分なりに読みとり応答できる資質や能力の形成につながり得ることも示唆された。

第二に，6年生の授業についてである。まず，教師は，全国的な魚食の減少という現象に対する児童一人ひとりの私的で多様な生活経験や生活実感を対話により授業空間へ引き出し，それらを起点とした授業展開を重視する姿勢を示した。教師は，各児童の生活実感や生活経験に基づく考えと，学級全体や社会的課題をつなぐ役割を担い，児童自身が問題を導き出せるようにした。次に，教師は，これまでの学習経験の想起や他者との学び合いの機会の保障など児童たちの困り感を解消できる方途を示し，一人ひとりの多様な考えを否定せずに尊重する姿勢を示した。こうした教師の役割や姿勢に支えられ，児童たちは問題に対する考えや提案を批判的な視点を含む様々な見方から議論や対話ができ得ることが示唆された。そして，教師は，児童たちが問題に対する自分たちの考えが学級内に留まらず学校外の人々に受け止められ，何らかの影響をもたらすことを実感して問題解決の展望をもてるように，児童たちの考えと学習成果の発信先であるA大学の学生を結びつける役割を担った。実際に，児童たちの成果物が掲示されたA大学の学生から感想が届くなど，児童たちが，自身の学習の成果を実感する機会も生まれた。

第三に，7年生の授業についてであるが，「３.研究の方法」の冒頭で述べたシティズンシップ教育の5つの過程のうち，①・②のみという部分的な授業展開であった。その中でも教師は，生徒の私的で多様な生活経験や生活実感及び既有の知識を尊重し，それらを起点とした授業展開を重視する姿勢を取り，個人の考えと学級全体をつなぐ役割を担っていた。その中で，性別役割分業観に関して，家庭や学校及び社会全体での状況について話し合う生徒たちの様子が見られた。

総じて，今回の授業実践の成果に基づくと，家庭科におけるシティズンシップ教育実践において，教師は，第一に，子どもの私的で多様な生活経験や生活実感及び既有の知識を尊重し，それらを起点とした対話的な授業展開を重視する教師の姿勢，第二に，子どもの私的で多様な生活経験や生活実感及び既有の知識に基づく考えとクラス全体，社会的課題，当該問題の解決，授業後の学級生活及び学校生活とをつなぐ教師の役割，第三に，児童の考えを可能な限り実現させる姿勢をとり学校外の人材等と連携を図る役割，という点が重要だと示唆された。その背景には，まず，学級経営とかかわり，教師が，日常的に教師と児童，児童間での信頼関係を構築できるように努め，児童の考えを安心して自由に表現できる雰囲気や環境を構成していることがうかがえる。次に，教科経営とかかわり，生活実感に基づく仲間との学習行為を重視したり，行為主体としての子どもの自由な感性と行動を下支えしたりする家庭科教育の特徴・特性があることがうかがえる。そして，B学校の特性とかかわり，B学校では，多様な個性を発揮し合える共生空間としての学校づくり，地域の自然環境に関する様々な課題を多様な見方や考え方から9年間一貫して探究する地域学プロジェクト，学習成果を地域・社会の発展に活かす学び方を重視してきた。こうしたB学校の特性が，教師の実践を支えている側面があることがうかがえる。

7年生での授業実践が部分的なものであったため，更なる検討や授業実践の余地が残されている。この点は今後の課題であるものの，今回の授業実践から，5年生から7年生まで一貫して既存のカリキュラムに家庭科におけるシティズンシップ教育実践を取り入れ実践する際に，教師は，前記した姿勢や役割をとることが重要だと示唆された。その際，当該授業だけではなく，日頃からの学級経営や教科経営のあり方に加えて学校全体として有する特性と連動することが教師の実践を支えることも示唆された。一方，家庭科におけるシティズンシップ教育実践を構想し，前記した教師の姿勢や役割のもと展開した授業による子どもへの教育効果という点については検討が不十分であった。このことに関して，今回の分析データからは，批判的な見方を含む問題の解決方法を検討できること，他者のニーズを読みとり応答できること，視野が広がり見通しや展望をもって問題解決に向けた取組ができること，といった点はうかがえるものの，クラス全体の状況を継続的に確認できたわけではない。この点も今後の課題となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 土岐圭佑，坂下眞美，山崎博幸	４．巻 74
２．論文標題 家庭科におけるシティズンシップ教育実践を展開する教師の姿勢と役割－小学６年生を対象とした授業実践より－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 北海道教育大学紀要（教育臨床研究編）	６．最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/0002000104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土岐圭佑，山崎博幸，坂下眞美	４．巻 42
２．論文標題 家庭科のシティズンシップ教育実践における教師の姿勢や役割と学校の特性との関連	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本教育大学協会研究年報	６．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土岐圭佑，山崎博幸，坂下眞美	４．巻 74
２．論文標題 家庭科におけるシティズンシップ教育実践の展開過程の具体的検討－小学5年生を対象とした授業実践より－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 北海道教育大学紀要（教育臨床研究編）	６．最初と最後の頁 95－107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/0002000022	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関